

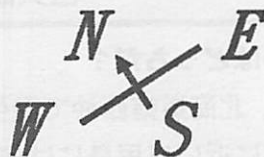
藤沢

2014年9月1日

第244号

エコネット

藤沢環境運動市民連絡会議
(略称) 藤沢エコネット



主・奥尻から東日本大震災を見る
な・ふるさとに帰りたい
事・第5回ふくしまっ子リフレッシュ
記・放射能測定値・気象情報

http://members3.jcom.home.ne.jp/fujisawa_econet/

事務局 e-mail: aoyagipc@jcom.home.ne.jp 青柳

☎/FAX 0466-87-4922

地球温暖化と異常気象の関係

時々刻々変化する毎日の気象が重ね合わされ、時間的・空間的な平均値で認識される。例えば、年平均気温の経年変化を100年の時間軸で見た場合に一定のトレンドが現れる。これが地球温暖化である。この関係から分かるように、高温をもたらす気象の頻度が増しているからこそ地球温暖化が進んでいる。

この表現は、異常気象が地球温暖化に影響する、という関係性から受け入れやすい。問題は、地球温暖化により異常気象が増えるか？である。この問題に答えるには、いくつか整理が必要だ。

数十億年をかけ、無生命圏と生命圏がせめぎ合うなかで、現在の地球の大気成分ができた。現在の大気を含む地球系では、二酸化炭素などの温室効果ガス（GHG）の濃度が増すと気温が上昇すること（温室効果）、および気温が高まれば大気中により多くの水蒸気を取り込むこと、が大きな特性である。

人間活動を起源とするGHG濃度が上昇し、地球温暖化が進む。すると、大気中の水蒸気量が増える。実は、水蒸気もGHGの一種なのでさらに気温が上昇する（正のフィードバック）。大気中にますます水蒸気が増えるので、対流圏（大気下層の約10km）でより多くの雲が発生し降水量が増大する。降水量増大の様相はいろいろである。従来降水量が少ない地域で発生し、一回の雨の降水量が増える。

こうした応答の根源には「自然には特別な意思は無く、エネルギー的にバランスのとれた状態を作り出す」という原則がある。水蒸気が雲粒になり雨を降らすのは、歪んだ状態を解消するメカニズムに他ならない。それでも環境容量を超えて、正のフィードバックが働き始めた兆候が認められる限り、人間の活動様式を変えるのが必然である。

NPO 法人シティ・ウォッチ・スクエア

理事長 林 陽生



マユミの実（長久保公園で撮影） 矢板氏提供

奥尻から東日本大震災を見る

巨大防潮堤はいらない

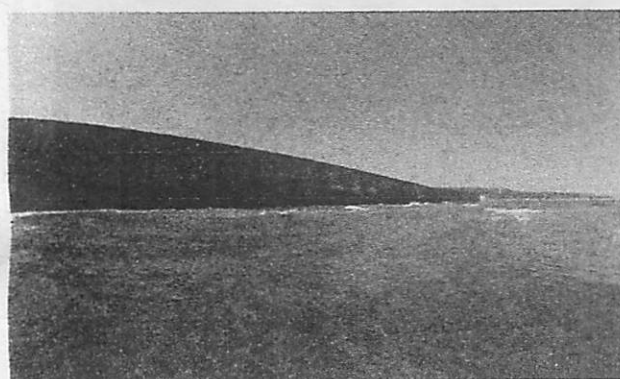
津波から人を守るのはどっちだ？

1993年7月12日、北海道南西沖で発生したM7.8の地震により、震源地に近い奥尻島には何と数分後に津波の第一波が襲来し、高さは29m、死者、行方不明者は198名に達した。ここで生死を分けたのは避難行動の遅速であり、迅速に高台に避難した人は助かっている、ということだ。そしてもう一つ奥尻に関心を、持っているのは「巨大防潮堤は、何を守るのか？」という素朴な疑問から、このような建築物は、決して人の命や暮らしを守らないのではないか？という事実を検証していきたいという思いから奥尻島を訪れた。そして防災対策から「費用対効果」の面で考えると、巨大な資金を要する防潮堤は果たして最良の選択なのか？という視点でも考えていきたい。

奥尻島の南部、津波でほぼ壊滅状態になった青苗地区を訪れて最初に目に飛び込んでくるのは巨大な防潮堤。そして海岸線の海が見えない道路。それらに守られているかのように並ぶ海岸線の住宅や商店。島の人に聞くと地区の先端の地域は全員安全な高台移転を果たしたが、それ以外の地区の人々はそれを拒み、津波



10数万円 石碑「此処より下に家を建てるな」
岩手県宮古市重茂姉吉（おもえあねよし）地区



211億円（最大14m 総延長14km 奥尻島青苗地区）

で家屋が流された同じ場所に家を建て直したとのこと。島を取り囲むように作られた巨大防潮堤建設で211億円が支出された。

石碑に守られた村

岩手県宮古市重茂姉吉地区は11世帯約40人が暮らす漁村であるが、3.11大津波による被災家屋はなかった。海拔60m、坂道を800m登った所に石碑がある。昭和大津波の後に建てたもので、～～此処より下に家を建てるな～～とあり、住民はこの先祖の教訓を守った。そして震災時にはほとんどは家に逃げ帰って無事であった。

21年前の惨事は規模すら違うにしろその後の自然災害と復興のあり方に大きな教訓を与えてくれている。今の東日本大震災への政府の復興策へ憤りを感じている自分にとってその原点となるべく奥尻にもう一度目を向けてみたかった。そして僕の心にいつも奥尻があったのは大切な友人であり、仕事の大先輩でもある、写真家中村征夫氏の体験談だ。

震災当時偶然にも津波被害が最も激しかった青苗に宿泊していたのだ。靴を履いて逃げようとしていた時「靴なんか履くな」という声で素足で坂を上がって逃げ、九死に一生を得た。後日談で「その時、その場に居た」報道者としてどうあるべきか、ということも私に教示してくれたのだった。私自身、同じ海に生きるものとしての偉大な先輩からの「言い伝え」は何者にも代えがたい。

被災者の悲しみ、先人の教えは決して生かされない

東日本の被災地では鉄道はほぼ完全に復旧し他のインフラに関しても8割以上は回復している。

反面、民生分野では住宅の復旧率は岩手、宮城、福島の3県で5%に満たない。福島県内の除染作業も遅々として進んでいない。一方「津波防災の基本は巨大防潮堤」として総延長400km 総事業費8,500億円の巨大プロジェクト。大津波による災害は「災害資本主義の格好の出番」なのです。自然と向き合い共生してきた先人の教えが生かされないばかりか東日本大震災での被災者を無視した政府の復興策に見られる「災害資本主義」により被災者の悲しみや苦しみが永遠に報われることはないのではないか？

奥尻の教訓は生かされるのか

奥尻の災害後、当時、人口 4,700 人の島に義援金 190 億円が寄せられ復興資金と合わせて 752 億円の巨額の資金が投じられた。これは被害額 700 億円を上回り、3 年後には防潮堤、下水道、住宅新築工事も全て終了した。

しかし、その資金の内訳を見ると奥尻の未来に向けての有効な使い方があったか疑問が残る。防潮堤や港湾整備、人工地盤等、建設費類に大部分が使われ小学校整備、産業振興策など未来に向けての持続可能な復興資金の支出は 40 億円(5%)だった。何より防潮堤や港湾整備など約 350 億円もの建設にはその後の補修工事等「常にメンテナンスが必要なもの」そしてその予算は常に自治体が負担していかなければならない。2005 年から 2010 年にかけての人口減少率全国第 2 位の奥尻町では今後どのようにその予算を捻出していくのであろうか。

点灯しない避難誘導灯

高台への避難誘導灯は塩害などにより大部分が壊れ、夜間は役に立たない。現在、修理改築費は財源不足のためめどが立っていない。

若者が島から出て行く一方であり、防災設備の維持管理に財政的余裕は見込めない。これは東日本大震災の復興に大なる教訓を与えていると考えるべきではないだろうか？インフラは将来にわたって持続管理可能な水準にとどめ、「今の問題」だけでなく「将来を見越した復旧施策」を考えるのが、持続可能な安全安心対策のインフラのあるべき姿ではないか。それが何より悲運にも海に消え亡くなった方々への最大の弔いと言えるのではないだろうか。

奥尻の海から巨大な防壁の様な堤防を眺め、しみじみ思うのであった。

武本 匡弘

※参考資料

月間「経済」 2014 年 1 月号 新日本出版社

「巨大防潮堤は何を守るのか？」 川崎 健

みずほ総合研究所 みずほリサーチ 2013 年 9 月

「津波被災から 20 年の奥尻島の苦境」 岡田 豊



ふるさとにかえりたい ーピキニを見れば、ふくしまが見えるー

8 月に写真絵本「ふるさとにかえりたいーリヨンおばあちゃんと被ばくの島ー」の朗読とスライド・トークを聞く会が藤沢でピキニふくしまプロジェクト主催のもと、開かれました。

「1945 年、リミヨおばあちゃんの住む島のとなりで水爆ブラボーの実験がありました。白い灰がふり、多くの人たちが病気になっていった。うまれる前に死んでしまうあかちゃんもいた。たくさんのおかあさんが、泣いた。あれから 60 年、海も空もきれいに見えるけど・・・」と作者である羽生田有紀さん本人が、美しい声でゆっくりかみしめるように読み始めると、会場はシーンと静まり返りました。

ピキニ環礁でおこなわれた水爆実験で、となりのロングラップ島の住民が被曝し、転々と移住して 3 年後に帰島させられます。しかし流産や異常出産が急増し甲状腺障害も見つかり、31 年後に全住民が島から脱出してメジャト島に移住しました。その事実をおばあちゃんの語り口で詩にしたものです。

3 年後に、もう安全だと帰島させられるなど、福島今の状況に似ていて、身につまされる思いがしました。

スライドトーク「被ばく ロングラップ島 女性たちの 60 年」はフォトジャーナリストの島田興生さんがマーシャル諸島ピキニ水爆実験の後遺症取材した写真を映しながら、とても詳しいお話をしてくれました。島田さんは現地に 6 年間も暮らし、「マーシャルの子どもたち」(福音館書店)など本を多数出し、今夏は 8 月 16 日より 9 月 30 日まで第五福竜丸展示館で彼の写真展が開かれています。

司会はピキニ・ふくしまプロジェクト会員の武本匡弘さんで、ダイビングスクール・ババラギを主宰するプロダイバーです。マーシャル諸島など環太平洋の海を潜り、最近山口県上関原発予定地の海を潜って撮影し、写真展やスライドトークをしています。彼独特の人を笑わせる語り口で進行しました。

この「ピキニふくしまプロジェクト」のイベントはどこにでも出張するそうです。

(青柳節子)

2014夏ふくしまっ子リフレッシュ in 湘南&こどもの国

7月27日から3泊4日をこどもの国と藤沢市少年の森で思いっきり遊んで帰って行った3才から46才までの親子30人のふくしまっ子たち。いつまでも元気でと心から祈っています。

2年前に初めて来たときには保養にあまり慣れていないせいか、何となくごちなく、知らない者同士という事もあって親子で過ごす時間が多かったのです。しかし3年を経て、何度か保養に来ている子どもたちが多く、県外に出れば、外を自由に走り回れる解放感で、知らない者同士もすぐ友達になって飛び回り、本来の子どもらしさを取り戻したようでした。

こどもの国では「アナと雪の女王」等を歌い、絵の具で大布に絵を描き、タケコプターをつくり、また半日はプール遊びをしました。湘南台のプラネタリウムは好評で、少年の森では夕食のほうとうづくりやアスレチックなど思い出いっぱいありました。

湘南白百合学園の13人も高校生や湘南のボランティア・スタッフ大勢のご協力で様々なハプニングも乗り越えることができました。

助成金や寄付金をたくさんいただき、皆様の熱いご支援に心から感謝いたします。

(福島子どもたちとともに・湘南の会 青柳節子)

藤沢気象ニュース

8月は台風と前線の影響のため各地で豪雨となり、甚大な被害が発生しました。この間、藤沢で雨量強度が最も強かったのは、台風11号通過時の20mm/時でした。西日本で発生している100mm/時以上の雨とは、いったいどのような状態なのでしょう。

NPO法人シティ・ウォッチ・スクエア：ホームページ
<http://citywatch-net.sakura.ne.jp/WP/>

放射能測定値

施設の室内を測ってみました(8月中)

(HOROBA Radi) 単位($\mu\text{Sv/h}$)

ルミネ藤沢店 6F 0.064 同 6F EVホール 0.071

ルミネ藤沢店 2F 0.043

さいかや藤沢店 7F EVホール 0.043

ダイエー藤沢店 2F 0.029

藤沢市役所 7F EVホール 0.073 (EV=エレベーター)

(低炭素都市ふじさわをめざして)

ECONET INFORMATION

「遺言」 原発さえなければ

福島3年を追ったドキュメンタリー

9月19日(金)2回上映 10:00- 17:00-

横浜関内ホール(小ホール) 前売り券1200

主催:「原爆と原発を考える」神奈川県実行委員会

問合せ 090-7405-4276 090-8046-0925

第47回 みんなの消費生活展

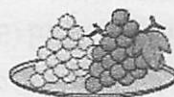
いっしょに考えよう、これからの暮らし方

展示 講演会 野菜即売 クイズラリーほか

9月6日(土) 10:00-17:00

7日(日) 10:00-15:00

明治市民センター



地球温暖化時代を考える

地球温暖化で食料生産はどう変わる?

講師 林 陽生さん(NPOシティ・ウォッチ・スクエア理事長)

11月1日(土) 14:00~ 市民会館第1展示ホール

主催 湘南のなごさを守る藤沢市民の会

協賛 藤沢エコネット 湘南学習会議

横須賀港に浮かぶふたつの原子炉のこと

もっと知ろう 学習会

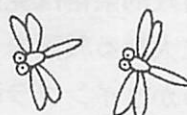
日時 9月27日(土) 14:00~

場所 藤沢労働会館第4会議室 資料代500円

講師 呉東雅彦 弁護士

主催 厚木基地爆音防止期成同盟藤沢支部

TEL: 046-240-7450



藤沢エコネット

会費・購読料の納入をお願いします

ゆうちょ銀行(9900) 店番(029)

当座預金 0046501 万 藤沢エコネット

(従来用紙の方法も利用できます)

会員募集=年会費・購読料→3000円

事務局会議 9月11日(木) 10:00~

湘南台市民活動推進プラザにて

《編集後記》毎日轟音を響かせて藤沢の空を飛ぶ米軍ジェット機。「安倍政権になってから爆音がひどくなっている」と住民は言う。加えて8月15日にオスプレイが藤沢上空を飛んだことが目撃された。2年前10月、藤沢市議会では「在日米軍へのオスプレイ配備、低空飛行訓練計画の撤回を求める意見書」が採択され国へ提出された。これから危険な米軍機が藤沢住民を苦しめることになるのはどうしても許されない。市民の意見が無駄ではないと信じてい。

(H)